
うねうねばなし

凄い腹筋の蛇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

うねうねばなし

【Nコード】

N6099Y

【作者名】

凄い腹筋の蛇

【あらすじ】

現実と幻想の狭間、うねうねとうねる世界の中で蛇は酒を飲み干す。人々が生きる日常のすぐ隣、もう一つの世界で紡がれる少し不気味で不思議な物語。

祖谷古手川一丁目の猫

今年の秋は短いらしい。これは天気予報士の言った言葉によるが、蛇の北岡平八郎はそれを肌で感じていた。その少し滑りのある鱗が、冷たい風の中に少し早い冬の到来を予感したのだ。

「ふん、ブルつと来ちまった。こりゃ今夜は冷えるだろうな」

シルクハットを深めに被り、蛇はうねうねと身体をうねらせる。向かう先は友人の味噌太郎の住む屋敷だ。最近はもっぱら、そこで飲むのが決まりとなっていた。

祖谷古手川一丁目の駄菓子屋の裏、県立医科大学のキャンパス沿いの一本道。今では暗渠になっているかつての笹迎え川に想いを馳せながら、シルクハットの蛇は這って行く。時折若い学生の笑い声を聞きながら、俺にもあんな時があったのだろうな、と言って笑った。

その屋敷についたのは夕方4時を少しこえたくらいだった。賑やかな街から少し離れた場所に居を構える友人宅。この近所には珍しい日本屋敷であり、その歴史も非常に古い。近年になり流石に老朽化が目に見えて分かるようになったので、それなりに大きな改修工事をしたというが、それも蛇舅母八幡宮の宮大工に頼んだというから妙にこだわっている。

そんな屋敷の門をくぐると、庭先に煙があがっているのが見て取れた。

「おうい。味噌太郎、俺だあ」

「やあ、平八郎じゃないか。今日は早いな」

七輪の上にサンマが乗っている。滴り落ちる脂がジュツという音を立て、煙となりもうもうと空へとあがっていた。パタパタと団扇で扇ぐ味噌太郎。その姿はまるで狼煙を上げているようだ。

「黒猫が狼煙を上げるとは恐れ入った」

「恐悦至極、と返そうか」

味噌太郎はすました顔でそう言うと、扇ぐ手を休め顔を洗った。平八郎は味噌太郎の傍へとやってくると、尻尾に引っ掛けたビール袋を渡す。中には小瓶の焼酎とビール一缶、梅干しと剣先スルメにビーフジャーキーといった品が入っている。

「おいおい、これは生粋の猫にすすめるもんじゃないね」

「お互い様だ。七輪で焼いたサンマで飲もうって猫と蛇がどこにいる」

「それはそうだな。……相変わらず焼酎に梅干しか。君の好みは分からんね」

ガサガサと袋の中身を取り出す味噌太郎。平八郎には焼酎と梅干し、自分はビールとスルメだ。互いに器を寄せて軽くぶつけると、「おつかれ」と言っつて酒に口をつけた。

これがいつもの姿。

誰にも見せた事の無い、二人の姿なのだ。

二人はのんびりとただ七輪の煙を眺める。そろそろ頃合いかと味噌太郎がサンマを下ろすまで、ちびちびと酒を飲みながら。サンマを開いて二人で分け、味噌太郎が七輪に次のサンマを乗せた時に、それまで黙っていた平八郎が口を開いた。

「親父さん、大丈夫かい」

「……………」

耳を少し伏せる。しかしそれは一瞬の事で、すぐにいつもの調子に戻った。

「飼い主としてなら、問題ないさ。定刻通りに餌もくれるし、部屋を清潔に保つのは家政婦がやってくれるからな。しかしまあ、長くはないだろう」

味噌太郎はもしかしたら無理をしているのかもしれない、と平八郎は思った。

「最近、俺の言葉が分かるらしい。それだけ、死に近づいてるのさ。気をつける、そのうち君の事にも気づきかねない」

そう言っつてビールを飲む味噌太郎の姿は、少し痛々しかった。

味噌太郎の飼い主は最近、妻を亡くしたらしい。早くに一人息子に先立たれたというから、今その胸にある孤独は計り知れないだろう。この頃、味噌太郎と飲む時によく話題にあがっていたのは、仕事の愚痴を味噌太郎に話すという事だった。今まではそんな事、一度も無かったというのに。

「お前に…………『死』に、惹かれちゃったのか」

「ああ。ここの家族は、どうしてか皆俺を可愛がってくれたからな。逝っちまうのも、早いってもんだよ」

クツクツク、と笑う味噌太郎。平八郎はサンマを食べながら、かつての友人の言葉を思い出す。

横切りたくなんてないのさ、俺だって。可愛がられたらそれだけ、悲しくなるだろう。

かつて一度だけ弱音を吐いたその姿に、今の味噌太郎は重なって見えた。

秋は日が落ちるのも早い。二人が静かに言葉を交わしているうちに、辺りはすっかり暮れ始めていた。サンマは旬だけあって脂も乗りうまかったハズなのだが、印象に残っていない。湿っぽくなっとな、と味噌太郎は謝ったが、なあにこういうのも悪くないさと平八郎は答えた。

門の方から、車のエンジン音が聞こえてくる。味噌太郎は息を吹きかけて、七輪をただの土塊へと変えた。

「今日は裏の藪をくぐって帰ってくれ」

「おう。……なあ、味噌太郎」

平八郎は、尋ねる。

「仕事は、楽しいか？」

聞いた所でどうなるものではない。しかし、それでも聞かすには

いられなかった。何故ならこの仕事が終わったら味噌太郎とは……もう会えなくなるだろうから。

味噌太郎は、答えた。たくさんの想いを込めて。

「悲しい事から目をそらす事で楽しくなれるのなら、この世界に楽しくない事なんて無いだろう」

「……そうか」

平八郎はそう言って、深々と帽子を被る。別れの挨拶にひとつ尻尾を振ってから、藪の中へと姿を消した。味噌太郎は背中にご主人の呼ぶ声を聞きながら……その姿が消えるまで見送り続けていた。

平八郎はうねうねと帰る。

今使ってるねぐらともそろそろお別れかもしれないな、と思いつながら。冬にうるついても目立たない所は……沖縄かな、と冗談めかして呟いた。そして、自分でも笑えない冗談は言うもんじゃないと自己嫌悪する。

通りに店を構える電気屋の展示してあるテレビが、天気予報を伝えていた。平八郎は気を取り直してそれに見入る。今日は放射冷却でかなり冷えるようだ。

「やれやれ、いい話はどこにも無いのかね」

平八郎はため息をついて空を見上げた。いつの間にか空には満天の星。その光がやけに冷たく思えて、大きく一つ身震いをする。平八郎は民家の間へと進路を変える。そしてそのまま、建物の影の中へと溶けて行った。

その後、程なくしてその街から一匹の猫と一匹の蛇が消える。しかしその事に気づく者など、誰一人として居なかった。

時計屋の日本人形

落ち葉の時期と簡単に言っても、その葉っぱの種類によって時期は変わる。蛇の北岡平八郎がその森の中の小さなお社に住み着いたのは楓の葉が落ちる時期だった。

そのお社は本当に小さく古いものだったが、毎日早朝に奇特な人間が日本酒を備えている。軽くではあるが、周囲の掃除もしていた。こりゃあいいやと平八郎は直ぐにそこを新たな根城と決めたのだ。た。

しかし、いざ住んでみると中々に面倒だ。お社の中は土埃と狸の糞に虫の死骸、ヤモリの卵の殻が転がる。まずはこれを掃除しないと住めたもんじゃない、と平八郎は杉の葉をくわえて箒として掃除を始めた。

サツ、サツ、とお社の扉を開けて掃き掃除をする。誰かが供えたワンカップを見て、これから毎日酒がただで飲めるぞとほくそ笑んだ。そしてしばらく頑張つて掃除をしていると、近くに何かの気配を感じて平八郎は物陰に隠れた。

「おんや。誰だかねえ、こんな事してんのは」

それはどこかで見た老婆だった。一体どこだったか、としばらく考えていると、老婆は小さな箒を使って平八郎が掃除していた場所を代わりに掃除する。さすがに蛇よりは上手く掃く。見る見るうちにお社は綺麗になって行った。

「掃除するなら、ちゃんと最後までやんなせや。ほったらかしたら

余計汚いろう」

老婆はそう言ってから、お社に置かれたワンカップを見て……中身を捨てた。

「……っ!？」

そして、空いた瓶をビニール袋に入れてしまった。心の中で何かが崩れてゆく平八郎。そして恨めしそうに去って行く老婆を眺める。老婆は乳母車のような物を押しながら、来た道を帰って行った。

乳母車？ 平八郎は疑問に思う。そして思い出した。あの老婆は、この町では有名な老婆。毎日乳母車に人形を乗せ、町を歩き回って住人たちに気味悪がられていた。

「参ったな。夢の中に生きてるのか、こちらに片足を突っ込んでるのか。どちらにしても、気の毒なこった」

ため息をつく。しかしお社を綺麗にしてくれたのには感謝しないとな、と平八郎は去って行く老婆に一つ礼をした。

その日の夜。

平八郎はお社の屋根の上で、きんぴらゴボウを着に月見酒と洒落込んでいた。今日は空気も澄み切っており、月の輪郭はクッキリとしていた。それはまるで鋭利な刃物のように夜の空を円く切り取っている。

「僥倖僥倖、引つ越し祝いとしては上等過ぎだな」

上機嫌で月を見上げていると、平八郎はふと何かの物音を聞いた。それはとても小さく、生きた気配を感じさせない。ならば同業かと振り返ると、そこには一体の日本人形が。あの老婆が連れまわしていた人形だった。

「私も同席していいか」

「ああ。何か持って来たかい？」

そう尋ねると日本人形はその身体に似合った巾着袋から梅酒の小さなカップを二つ取り出した。

「昼間の詫びだ。私の主が迷惑をかけたからな」

「梅……ああ、偶には甘い梅もいいな。昼間の件は気にするな、あれは元々俺の物じゃねえ」

ニヤリと笑うと平八郎は尻尾を振って招く。日本人形は少しホツとした表情でお社の屋根に登った。

日本人形は丁寧に梅酒のカップの蓋を開けて平八郎に渡す。口でくわえて受け取ると、空中にカップを浮かせた。そして日本人形と乾杯すると、二人で月を見ながらそれをチビチビ飲み始める。

「……蛇よ、ここに来たのは今日が初めてか？」

「いや、町に来たのは4日前さ。しばらく彷徨いて、今日ここに住処を決めた」

「ならば、我が主の噂は聞いただらうな」

平八郎は頷いた。

噂だけなら初日にカラスから聞いた。実際に見たのは二日目、それから今日までその姿を見ていなかったが、なんとなくは覚えていた。

「時計屋の婆さんだろう。旦那さんが鬱気味だとか聞いたが」

「そうだ。もつと言えば、二人とも狂っている。あの店で狂っていないのは時計くらいなものだ」

疲れたように呟く日本人形。酔った頬に赤みが差していた。

「その理屈で言えばお前も狂ってる事にならねえか」

「ふふふ、そんなのとっくの昔だ。今では狂い過ぎて正常に戻っているくらいだよ」

そう楽しそうに笑う日本人形の姿は、少し気味が悪かった。きつと月に照らされたその姿が、美し過ぎたのだろう。平八郎はそう思っつて、頭を数回振った。

日本人形は名前を名乗らなかった。ただ、あの老婆の娘と同じ名前だと言った。過去に生きたいと願った主の為の名前らしい。本当の名前は、もう忘れてしまったと言う。

「店の時計を、一度じっくり眺めてみるといい。一つ一つが違う時間を生きているんだよ。私も時計の一つなんだ、針は無いけどね」

「偶に休みたいと思わないか？」

「アハハ、まさか。時計が休む時は役目を終えた時さ」
そう言って梅酒を飲み干した日本人形は、少し陰のある表情になる。

「近く、また一つ役目を終える時計がある。私はそれを看取らなければならぬ。もしかしたら、それが私の役目なのかもしれないね」
「そりゃどういう意味だ？」

その問いには、答えなかった。

日本人形は軽やかに屋根を飛び降りると、平八郎に手を振る。

「今日はありがとう。この町はいい町だよ。君も気に入ると思う」

「……そうだといいな」

日本人形はその言葉に微笑むと、くるりと回って闇の中へと歩いて行った。平八郎は何だか無性に悲しい気持ちになり、カップの底に転がる梅の実を口に含む。そして、やはり梅は酸い奴がいいなと思った。

三日後。

平八郎が町を這っていると、噂好きなカラスが話かけてきた。

「旦那、旦那、もう聞いたかい？」

「ん？ なんの話だ」

「何って決まってるだろう、時計屋の心中事件さ。今この町じゃその話題で持ちきりじゃないか、旦那は聞いてないのかい？」

心中事件。

狂った夫婦と日本人形が頭をよぎった。

「火つけ心中だつてさ。近所の家にはいい迷惑だぜ。ん？ 旦那、どうした」

「その現場、日本人形が無かったか」

平八郎は聞かすにはいられなかった。直感的に、彼女が火をつけたのでは、と思ったのだ。もしかしたらそれを見届けるのが彼女の言う役目だったのでは、と。しかし、カラスの答えは意外なものだった。

「日本人形？ 旦那、大丈夫かい？ あのババアが連れまわしていたのは出来の悪いビニール人形だ。日本人形なんて上等なもんなんで持って無かったはずだぜ」

「……それは本当か？」

カラスは頷く。

平八郎は、言いよりの無い虚無感に包まれていた。

何となく、もう会えないような気がしたのだ。彼女は役目を終えた。きつとそうなのだ。ならば、今はもう休んでいるのだろう。わけもなく、そう思った。

何やら分からず首を捻るカラスをよそに、平八郎はあの月の下で見た彼女の姿を思い出していた。そして、また会いたいと思つてしまつた自分に苦笑いする。一体いつまで若いつもりなんだ、と。

平八郎はカラスと別れた後、お社へと戻つてお供え物の置かれた台を見る。変わらず置かれたワンカップを見ながら、今夜からは独り酒かと呟く。それが何だか、無性に寂しく思えた。

ならばこれからは、毎日供えてくれる親切な誰かの為に乾杯しよう。

そんな事を考えながら、平八郎はうねうねとお社の中へと入つて行くのだった。

鏡池で出会った少年

長閑な町の外れにある、通称『鏡池』の水面を、一匹の蛇が泳ぐ。そのうねうねが、空を鏡写しにした水面を、これまたうねうねと切っていく。空を行くトンビは狙いを定めていたが、途中で何かに気づいて狙うのを止めた。

ああ、あれは違う。

あれは蛇の形をした何か。

それは平八郎を見かけた別の生き物たちも同様だった。あれは違う。だから無害だし無益なんだ、と。

だから、平八郎は今日も一人だ。これはずっと変わらない世界のルール。時折その法則が乱れる事はあるものの、じきにあるべき姿に戻っていく。それで構わないし、悲しいとも平八郎は思わない。水面をうねうね泳いでいれば全てを忘れる事が出来たのだ。

しかしその日、珍しくその法則を乱す者があらわれた。平八郎が気持ち良く泳いだ後、岸に上がって一つため息をついて「いつかやりたいバタフライ」と呟いた時。一人の少年がそれを目撃して驚いていた。

「蛇が喋った……」

おや、と平八郎は振り向く。そこにはボサボサの頭をした華奢な少年が立っていた。黄ばんだシャツに、所々黒く汚れたズボンをは

いており、平八郎は一目でワケありだと気づいた。

「最近は何だか喋るのさ。オウムやインコに負けてられないからな」

フフン、と笑うと少年は不思議そうな顔をする。

「喋れても、蛇はオウムに勝てないでしょ」

「……頭の回る子供は嫌いだ」

平八郎が拗ねると、初めて少年は笑った。楽しそうに、腹を抱えて。しかし次の瞬間、その腹を押さえて顔を歪める。

「……つつ、あ、あはは…痛う」

「どうした、怪我が」

少年は首を振る。そして、地面に力無く身体を横たえた。

「最近、変わったお客さんが多くて大変なんだ。お医者さんには行くなって言われてるから治んなくて」

それを聞いて、平八郎は暗い表情をする。コイツはきっと、この世界から外れたいんだろう。だからこの姿を見れたし、話しかけようとしたのだ。ならば平八郎の役割としては道先案内が妥当な所ではあるが。

そんな仕事には興味が無かった。

「事情があるなら話してみる。どうせ身投げでもしに来たんだろう？ 死ぬ前にスッキリしてみるといい。安心しろ、誰にも言わない」

さ

少年はまたしても驚く。目を見開いて、額に脂汗を浮かべた。何故知っているのか……しかしそんな事、どうでもいいのかもしれない。どうせ相手は蛇。他言なんかしないだろう。

「あ、あの……」

言いかけた、次の瞬間。遠くの方から誰かの怒鳴り声が響いてきた。

「うおらあ、どこ行きやがった！ 客が待ってんだろおっ！」

少年が、身を縮込ませて震える。平八郎はそんな少年に優しく声をかけた。

「安心しな。今のお前はこちら側の住人だ。奴にやあ見つけられんさ」

平八郎の言った通りだった。遠くからこちらへ歩いて来た恰幅のいい男は、少年のすぐそばを通りながら何も気づかずに通り過ぎて行った。

「何故？ 僕は一体……」

「何故と聞かれてもな。そう言うもんだとしか答えられん」

平八郎はそう言いながら、どこかから取り出したビニール袋の中から、白いフィルムに包まれたキャンディを出した。そしてそれを、少年に差し出す。

見た所ガリガリだからな。まずはこれ食べて元気を出すんだ。

……まあ、俺はオッサンだから子供の好きそうな物なんてこれくらいしか思いつかなかったんだが。

それは、ミルクキャンディ。以前、平八郎が大好きな薄荷飴と間違えて買った物だった。少年はそれを受け取ると急いで口に入れる。そして、涙を流して舐め始めた。

まったく、なんてツラだ。

平八郎は今持っている食料を出せるだけ出して、少年に与えた。

夕方になった。

少年は草村で眠っていた。平八郎はその姿を眺めた後、ゆっくりとその場を後にする。うねうねうねうね、這っていった。

そして、一件の民家にたどり着く。

暗がり、大小の人影が歪に交じり合う姿が、壁に映っていた。そこに、一際大きな影があらわれる。それは身の丈3メートルはあるうかという大蛇の影だった。

人影は、背後の大蛇に気づかない。ただ、その中の大きな影に大蛇が食らいつくと、何度か大きく痙攣をしてからピクリとも動かなくなつた。

家の中は静けさに包まれる。そして、次に子供たちの悲鳴が響き渡った。

それから一週間がたったある日の事だ。

あれから平八郎と共に池のそばの小屋に身を隠していた少年が、平八郎と一緒に池の水で身体を洗っていると、遠くの方に大人たちの姿を発見した。皆、長い棒のような物を持って池をさらっているようだ。その少し離れた所には小さな子供たちがいて、その顔ぶれに少年は見覚えがあった。

「美奈、早苗、有紀……皆、何で外に出られたんだろう」

「ありゃあ警察だなあ。大方、保護されたんだろうよ」

途端に少年の顔が輝き出した。それを見て、平八郎は頃合いかと頷く。

「よし、今から行って皆を安心させてやれ。まだお前なら戻れる」

「うん、分かった！ 僕、ちょっと行ってくるよ！」

少年は駆け出した。
後ろを振り返る事も無く。

そして、平八郎はその背中を眺めながら微笑んでいた。

ああ、行っちゃまえ。お前にゃこっちは似合わねえ。

そう言ってから、平八郎はうねうねと草村の中へと姿を消して行った。

それからしばらくした昼下がりに、平八郎は鏡池の水面をいつものようにうねうねと泳いでいた。それを狙うものなど居るわけもなく、平八郎は気持ちよく水面を波立たせ、空の景色を割って遊んでいた。

そして、岸にあがって一息ついた時。見上げるとそこには、綺麗な服を着た一人の少女が立っていた。少女は誰かを探すかのようにキョロキョロと辺りを見渡しながら……

平八郎のすぐそばを、通り過ぎて行く。

「さよならだ、お嬢ちゃん。お前さんにはもう、ここは必要ないだろっ」

去って行く少女の姿を見ながら、平八郎はそう呟いた。そして、満足そうに頷いてからうねうねとお社へと帰って行くのだった。

平八郎は今日も一人だ。

これはずっと変わらない世界のルール。時折その法則が乱れる事はあるものの、じきにあるべき姿に戻って行く。それで構わないし、悲しいとも平八郎は思わない。むしろこうした別れがあるのだから、幸せなのではないかと思っていた。

桜の木の下の蛙

暗がりを照らすのは提灯の灯り。一匹の蛇の影が、山道を細長く伸びて行く。行き交うのは人の形をした何かであり、決して人ではない。

コオロギの鳴き声が、今日は一際激しく響く。喧嘩でもしているのだろう。

蛇の平八郎は道を連なる提灯を頼りに、うねうねと這って行く。この闇は特別で、迷いやすいのだ。前からやってくる焼かれた老婆を器用に避けながら、平八郎は道を踏み外さないように慎重に進んでいた。

そして、平八郎は少し開けた場所に出る。そこには小さな屋台が立ち並んであり、まるで祭りの出店のようだ。着物を着た螭螂やドレスに身を包んだ白鳥たちが、そこかしこで店を出している。平八郎はそのうちの一件の店に立ち寄ると、店の主に声をかけた。

「俺だ。一枚、持って来たぜ」

「おう、待ってたぞ」

出てきたのは顔の無い坊主だった。平八郎の渡したビニール袋の中から、何やら細長い物を取り出して手に取る。そして、顔の表面のシワを歪ませた。

「えらく上等じゃないか。いい魂でも吸ったか」

「いらん詮索はするな。で、幾らで買い取るんだ？」

「ヒヒヒ、東八つだなあ。こりゃいい薬が出来る」

坊主が手にしたのは、蛇の抜け皮である。よほど貴重なものらしく、直ぐに上等な箱にしまった。そしてビニール袋に札束をいれて平八郎に手渡す。平八郎はつまらなさそうにそれを受け取ると、そのまま店を出ようとした。

そこに、坊主が声をかける。

「平八郎、酒か？」

「ん？ ああ、三郎の店に寄ろうと思ってるが、どうした」

「ああ……実はなあ」

坊主は言いにくそうに言葉につまる。少し考えてから、口を開いた。

「また里に下りて帰って来ねえ。悪いが、見かけたら帰るように声かけてくれねえか。今回はちと長すぎる」

「チツ、またかよ。分かった、酒が買えねえのは俺も困るからな」
これで何度目だ、とウンザリしていた。これだから、半端者は困る。生前の記憶なぞ邪魔にしなければならないというのに。

「頼むぜ、伍長」

「戦争は終わった、その呼び方はやめろ」

面白くなさそうに平八郎は言い捨てると、憂鬱そうに来た道を戻

って行った。

(邪魔にしかならねえんだ、本当に……)
そんな事を、つぶやきながら。

うねうねと森を抜けて、平八郎は小高い丘へとやって来る。奴が行くとしたらここしか思いつかない、と思っただけで来たが、その予想は当たっていたようだ。

そこには大きな桜の木が立っていた。その幹に寄りかかるように一匹の蛙が二本の足で立っている。平八郎は静かに、そのそばへと這って行った。

「三郎。花見にや時期が悪すぎるぞ」

「……平八郎、か」

三郎と呼ばれた蛙は静かに振り返る。少し疲れたような顔で、笑った。

「桜の木の下で待ってるって約束したんだ。だから、しばらく帰れないよ」

「一体、いつまで待ち続けるつもりだ。お前の故郷の桜はとっくに焼かれちゃっただろうが」

「分かってるよ。これはただの感傷さ。ただ、もう少しここに居させてくれないか。もう少しだけでいいんだ」

「チツ……」

平八郎はそれ以上何も言えなかった。こんな事だから、お前はさつさと死んじまったんだ。そんな事を思いながら、苦々しい顔をする平八郎。そして、死して尚想い続ける愚直なこの男を、羨ましく思ってもいた。

手放せば、強くなれると思っていた。だから手放したし、その事を後悔した事は無い。しかし目の前の男はその真逆を行き、今でもそれを大切にしていた。

その姿が、何故か平八郎には眩しく思えたのだ。それが無性に悔しく、そして悲しかった。

月の無い闇の中、誰も来ない桜の下で三郎と平八郎は佇んでいた。身を切るような冷たい風が吹いても、微動だにしない。ただその闇の向こう、そのまた向こうに何かを夢想していた。

そして……三郎が、口を開く。

「来なかった、な……」

それは、どこかスッキリしたような、寂しげな声だった。

「待たせた。じゃあ、帰ろうか」

「……ああ」

平八郎がそう答えた、その時。空から何かがヒラヒラと落ちて来た。はて、これは何だと三郎も見上げる。空中でそれを掴みとると、まじまじと見つめた。

それは、一枚の桜の花びら。

枯れているハズの桜の木から、舞い落ちてきた桜の花びらだった。

三郎は、ポタポタと涙を流す。恋人の名前と同じ名前の木の下、花咲く頃に交わした約束を思い、こぼれ落ちる涙を止められなかった。

「平…八郎、すまん……涙が」

「いいさ。泣けるなら、泣いた方がいい。それはお前が守り抜いた弱さだ」

「う…ううあああああ！」

三郎は泣いた。

闇の中、桜の花びらを握りしめて。

そんな三郎を、平八郎はただ見守り続けていた。在りし日の三郎

と、その花の名を持つ少女を思い出しながら。そして、無事に帰してやれなかった事をすまなく思うのだった。

雪兔と小春日和に見た夢

その日はとても寒い朝で、前日に深酒をしていた蛇の平八郎はくしゃみと身震いをしながら寢床から這い出た。発泡スチロールのベッドと藁の布団から出るのは少し名残惜しかったが、それ以上に日光に当たり身体を温めない事には冬眠してしまいそうだったのだ。普通の蛇ではないとはいえ、外見の特性に引っ張られて本当に冬眠してしまう可能性は否定しきれない。

「うああ、頭が痛え。こりゃ迎え酒だな」

そんな事を言いながらお社の扉を開けて外を見ると、なるほど寒いわけだと平八郎は舌打ちをした。外はうつすらと雪化粧をしており、お社の前には毎朝お供えをしている人の足跡が残っている。

「今年がおかしいのか、この場所がおかしいのかは知らねえが、やけに早く降ってくれたもんだ。身体を中から温めねえとやってられねえや」

平八郎は供えられたワンカップを開けて、ビニール袋から先日買った塩鮭を取り出す。本来ならば塩抜きをしなければ食べられない代物だが、平八郎は構わずガリガリとかじりついた。塩を舐めながら酒を飲む要領で、鮭をかじりながら酒を飲むのだ。キツイ塩気が平八郎の目を覚ました。

そこにやってくるのはカラス。朝から飲んでる平八郎を見て呆れた。

「旦那、せっかくの初雪だからって朝から酒かい」

「んー？ ただの朝飯さ。お前も飲みな」

「……まあ、いただきやすけどね」

カラスも同類なのだ。平八郎が取り出した芋焼酎をコップに入れてもらうと、つまみにやはり塩鮭をもらってかじりついた。

「こりゃあいい、美味しいね旦那」

「ああ、脳天にガツンとくる味だ」

しばらくそうして飲み続ける二人。酔いもまわり、身体も温まった所でカラスが話題をふった。

「ところで旦那、お社の前の雪兎は旦那が作ったんで？」

「ああ？」

雪兎。そんなものがあつただろうかとお社の前を見ると、確かにそこには雪兎があつた。

「お前、俺が雪兎を作つて遊ぶタマだと思つのか」

「いやあ、誰でも童心に戻る事もありますあ。旦那だって小さい頃は雪遊びしたでしょうに」

「そりゃ何十年も前だろう。カマクラ、雪合戦、作るにしても雪達磨さ。雪兎なんてのは女の作るもんだ」

言いながら、平八郎は思い出す。冬場は外に出て遊ぶよりも家業の手伝いの方に時間を割いたものだ、と。同年代の子供と遊ぶ事など、殆ど無かつた。

お社の前の雪兎を見ながら、平八郎は少し感傷に浸るのだった。

日もすっかりあがり、酔いも覚めた所でカラスは山へと帰って行った。平八郎は暖かい寝床作りでもするかと材料探しにお社を出ようとする。その時、視界の端に何やら動くものがあつた。

「すんすん」

それは、雪兎。まるで生きているかように歩き回っている。今は平八郎のそばに来て、木の実で作られた鼻でニオイを嗅いでいた。

「また難儀な事だなあ。お前、誰に作られたんだ」

「すんすんすん」

言葉が分からないのか、雪兎は二度三度平八郎のニオイを嗅ぐと、飽きたのかそつぽを向いて駆けて行った。

「……食べねえからな。残念だ」

平八郎は心底残念そうに言うと、兎が去つたのとは別の方向へと進路を変えた。

それから、しばらく寒い日が続いた。毎日のように雪が降り、毎朝雪兎はその数を増やして行く。それはまるで、本当の兎が猛スピードで繁殖をするかの如く。いい加減、お社を出る度に「すすん」と鼻をひくつかせる雪兎にウンザリした平八郎は、犯人をとっつかまえてやろうと、夜寝ないでお社の扉の隙間から外を見張る事にした。

そして、犯人は早速お社の前にやってくる。その正体は小さな子供だった。

ギイツ、と扉を開ける。

「おいぼつず。それ、迷惑だから止めてくんねえか」

「……？」

その子供は、ポカンとした表情をして平八郎を見る。どうやら人間の子供ではなく、子供の形をした何かのようだ。

「お前……雪ん子か」

「ん。雪ん子だ」

言って、また雪兎を作る。雪兎は元気よく辺りを走り出した。

「いや、それ勘弁してくんねえか。今朝なんか俺を囲みやがったんだぞ。兎に囲まれる蛇とか格好悪いだろう。作るならせめてデカいものを一つだけ作れ。小さいのにチヨロチヨロされると危なっかし

「いんだよ」

「オラよくわかんねえ。兎しか作った事ねえもん」

なんてガキだ、遊び馴れてない俺の方が遊び方を知っているとは。平八郎は少し驚きつつも、ならば教えてやるうじやないかと無い腕をまくった。

「よし、まずは達磨だ」

「達磨？」

平八郎は得意気に宣言する。そして、雪ん子に雪達磨の作り方を教え始めた。最初はよくわからない様子の雪ん子だったが、コツを飲み始めると手際よく達磨をつくる。しかし、積もっている量もそんなに多く無かったので大した大きさにはならなかった。

出来上がったのは、小さな子供くらいの雪達磨。少し土が混じって汚いが、立派に雪達磨をしていた。

「上出来だぜ。明日も溶けずに残るかもな」

雪ん子も得意気に笑っていた。

次の日。

昨日お社のそばの物置の中に泊まった雪ん子を起こす為、平八郎は眠い目をこすってお社を出る。外は昨日までの寒さが嘘のように暖かかった。つまり、雪達磨としては良くない陽気となっている。案の定、昨日作った雪達磨は酷い事になっていた。それはまるで、細長い餅が懸命に立っているようで、平八郎は何だかおかしくて仕方なかった。

平八郎は笑いを堪えながら、物置をあける。なあ雪ん子、おかしいから見てみるよ。そんな風に声をかけようとしたが……

雪ん子はいなかった。

溶けたのか、単に去ったのか。

その理由は分からなかったが、寒さと共にやって来たのだから寒さと共に去るのはごく自然な事なのだろう。

しかし平八郎にはそれが残念でならなかった。だって、こんなに滑稽なものが見れないなんて。もったいねえなあ、と思う。

平八郎は雪達磨のもとに戻ると、もう一度まじまじと眺めた。そして今度は我慢せず、思いつきり笑ってみた。わはははは、なんだこれは、と。お前、これを見ないで行くなんて絶対損をしてるぞ、と。

平八郎はひたすらに笑い続けた。それがただ寂しいだけだという事に気づいたのは、笑い疲れて寝床に戻り、酒に飲まれた後の事だった。

夢の中、雪ん子と雪兔とあの汚い雪達磨に囲まれて。平八郎はただ笑いながら雪と戯れるのだった。

黄泉路に迷い込んだ少年

暗い黄泉路に行くのは亡者でなければならぬ。しかしながら、その道先案内人の仕事を引き受けてから、蛇の平八郎はイレギュラな存在への対応で大忙しだった。何せ毎日のように生きた者が迷い込んでくる。今日も一人、少年が迷い込んで来た。

周りには何も無い、ただ砂利が続く道を裸足で歩く少年。平八郎が近づくと、破顔一笑した。

「あ、へびだ」

「またテメエかクソ餓鬼。おっちゃんの手を煩わせるなど言っただろ」

少年は平八郎の言う事など聞きもしない。ニコニコ笑って平八郎を掴むと、ブンブン振り回した。

「あはははははは」

「やめろ、殺すぞ莫迦やろう！ オメエみたいなクソ餓鬼はさつさと帰りやがれ！」 ポーンと空に投げられる平八郎。空中で回転すると、軽やかに地面に降り立った。

「俺、帰りたくない」

「ダメだ、ここは生きてるヤツの来る所じゃねえ。帰れるなら、帰った方がいいんだ」

いやだいやだと泣き始める少年を、平八郎は大蛇に変化して締め上げる。気を失った少年をその背に乗せて、平八郎は今日もまた黄泉路を明るい方向へとうねうね這って行くのだった。

そんな事のあつた次の日の事だ。

その日、平八郎は仕事が休みだった。休みと言つても酒を飲んで寝るだけだ。特に秋も終わり季節は冬、外に出たつて寒いだけだ。今日もまた一日中飲むかと思つたが、残念ながら酒を切らしていた。

「昨日の晩に全部飲んじまったんだか。ああ、こりやあつまらねえや」

仕方なく、平八郎はお社を出る。うねうねと這つて行く先は町外れの誰も居ない寺だ。そこから、酒屋の三郎の所へ道を繋げる事が出来る。

坂道を下り、草村を抜ける。極力人目を避けながら寺へと向かっている、平八郎はどこからか聞き覚えのある声を聞いた。

「あ、へびだ！」

なんだと、と声のする方向へと振り返る。そこには高いフェンスに囲まれた病院らしき建物があり、その庭に裸足で歩くあの少年の姿があつた。

少年は確実に平八郎を見ていた。おいおい勘弁してくれと思つて

いると、声を聞いた白衣の男がやってくる。

「何をやっている、外には出るなど言ってるだろう！」

「いやだ、へび、へび！」

男は医者らしい。が、医者にしては荒っぽいなと平八郎は思った。医者は暴れる少年を拘束すると、注射器らしき物を少年の腕に突き立てる。「あぐっ」という声をあげると、少年は大人しくなった。その目はずっと平八郎を見ていたが、次第に力を失いどんよりと曇って行く。

なんだ、この病院は。

少年を担いで歩き去る医者を眺めながら、平八郎はただ呆然としていた。

その次の日。

何時ものように仕事をして、何時ものように少年と会った。平八郎は少年に、一体あの男は何者だと聞いた。

「え？ あれは医者だ」

「あんな乱暴な医者が出てたまるか。一体なんの病気なんでえ」

「知らないよ。ただ、外に行くなって。あと、俺は莫迦だから莫迦が人にうつるんだってさ」

益々分からない。流行病だろうか。しかしサナトリウムにしては人里に近過ぎる。平八郎には、少年が何の病気が全く分からなかった。

「まあいいや。クソ餓鬼、さっさと帰れ」

「い、いやだ！ もっと遊びたい！」

仕方のないクソ餓鬼だ、と平八郎はウンザリする。ただ、何となく強く言えなかった。平八郎は、しばらく少年に振り回されるままにしていた。

そして、それからしばらく経ったある日。黄泉路にあの少年がまた現れた。あれからしばらく会っていなかった。ああ、久しぶりだなと声をかけると、少年は何時になく明るい声で平八郎に挨拶をした。

「へび！ 俺、また来た！」

「おうクソ餓鬼、どのみちまた帰る」

そう口にした次の瞬間、平八郎は愕然とした。少年は完全にこちらに適応した身体になっていたのだ。

「お前……」

「なんかさ、俺すごく楽になったんだ！　ここ来ても苦しくなくてさ、なんか身体も軽いんだ！　俺、いっぱい遊べるよ！」

そうか、いっぱい遊べるか。

無邪気に笑う少年を見て、平八郎はただ悲しかった。お前は知らないんだ、生きる事の素晴らしさを。生きている、ただそれだけで素晴らしく尊いものだと言うのに。いつか、その事に気づく時がきつと来る。その時の事を思うと、平八郎はただ悲しかった。

「ようし、何して遊ぶ。もう帰れなんて言わねえ。おっちゃんが、たくさん遊んでやるよ」

「本当！？　やったあ！」

少年は飛び上がって喜ぶ。平八郎は今はまだ自分の気持ちを押し殺して、少年と遊ぶのだった。

その日の深夜。

町外れにある、とある病院で火災が発生した。

入院患者のうち症状が軽く、拘束を免れていた者は避難する事に成功したものの、重度の患者と診断されていた一部の患者、そして医者は逃げ遅れて焼け死んだ。

真っ赤な炎に包まれた病院。それに背を向ける一匹の蛇。その去り際に声をかけたのは、一人の顔の無い坊主だった。

「おう、今度は何人吸ったんだ」

「……うるせえ。今の俺は機嫌が悪いんだ。失せろ」

「ヒ、ヒヒヒヒヒ！ まあいいさ。次もいい皮になりそうだ」

そう言って消えて行く坊主を睨みつける平八郎。言い返す事も出ず苛立つが、それ以上に行き場の無い怒りや悲しみが胸を支配していた。平八郎は、夜空の月に向かって叫ぶ。

「うおおおおおおおおあつ！…！」

その声を聞いた者は誰も居ない。

ただ虚しく冬の夜風に掻き消されていった。

町のはずれの魔法使い

町はずれにある一軒の古い家屋には、齢八十にはなる銀髪の老婆が住んでいる。この町唯一の外国人であり、子供たちからは魔女と呼ばれていた。実際は料理教室をする傍らガーデニングもやっており、付近の住人からは非常に愛されていた。

その家に蛇の平八郎が訪れたのは、ただの偶然でも気まぐれでもない。軒先に吊してある干し柿を物欲しそうに眺めていた所を見つけたワケでも、ましてやその時一つ分けてもらって以来調子に乗って通うハメになったワケでもない。

彼女には死期が訪れていた。

なのに、死ぬ事無く生き続けている。それが異常だった為、調査を依頼されていたのだった。

今日も平八郎は老婆に招かれ、居間でレーズン入りのパンケーキをご馳走になっていた。

「コイツは美味しいな。洋酒に漬けてもどしたのか？ 香りがとんでもなく良いじゃねえか」

「あら、蛇さんでもお酒に詳しいのね。ラム酒をベースにしたシロップで戻して生地練り込んだのよ」

銀髪を後ろで結わえた老婆が、平八郎に微笑みかける。その表情は、とてもじゃないが死期の近づいた人間のものとは思えなかった。

もぐもぐとケーキを食べる平八郎。一通り食べ終えてから、老婆に尋ねた。

「婆さん、俺が何者かだいたい分かってるんだろう。何故、もてなす？ 生きたいと願うなら、拒絶なりなんなりするもんじゃないか？」

「……お迎えに来てくれた方には、ちゃんとおもてなしをしたいのよ。それに、見て欲しいものがあるから」

「見て欲しいものだと？」

老婆は立ち上がると、居間のカーテンを開ける。そこには冬に咲く花が沢山植えられた、立派な庭があった。

「おお、見事じゃないか。俺あ寒椿しかしらねえが」

「手前にあるのがポインセチアよ。その向こうにはサザンカ、あっちにはサイネリア、プリムラ。ここは、私と夫が愛した庭なの」

老婆は慈しむように庭を見る。

「死んじまったら、手入れなんて出来ねえな。あんたが死んだ後は、この庭は荒れちまうか。だからお迎えを断ってるのかい？」

以前、知人に聞いた事がある。あそこの老婆と話をしていると、黄泉路に連れて行こうという気がなくなる、と。この事に同情したのだろうか。

「……私はね、死んだ後にこの庭を手入れしてくれる人ならもう見つけているの。料理教室で知り合った方よ」

クスリと笑った。

「普段から人当たりを良くして、誰に対しても優しく。そういう風に生きて行けば、庭を引き継いでくれる方も出てくるわ。こうした事の為に、私は他人に親切にしているの」

「ははは。打算的な生き方だが、そいつはそいつで立派さ。なら、もう死んでも平気なワケか」

平八郎の言葉に、微笑む老婆。なんだ、簡単じゃないか。平八郎は気が抜けたような、ちよつと拍子抜けしたような顔をする。しかし、次に老婆が言った言葉に唖ってしまった。

「けど、出来ればあの人に迎えに来て欲しかったわ。丁度、あなたが乗っていた安楽椅子で息を引き取ったの。最期を看取った時、私に言ったわ。『お前が死ぬ時は迎えに来るよ』って。それが楽しみだったんだけど……仕方ないわよね」

平八郎は、黙り込んでしまった。

そんな事を言われたら、俺が連れて行けなくなるだろう、と。

「婆さん、そりゃ卑怯だ。連れて行く気が起きなくなるだろ」

「ふふふ。それを期待して言葉を選んでいるのかもしれないわね。なんせ、私は魔女ですから」

まるで悪戯好きな少女のように笑う老婆。平八郎は完全に手玉に取られていた。

「チツ、分かったよ。俺はあんたを連れて行かねえ。また代わりの

奴が来るだろうが、上手くやんな」

「ええ。アナタで五人目よ、そう言ってくれたの」

面白くなさそうにミルクティーを飲みほすと、平八郎はテーブルの上に置いたシルクハットを深々と被る。老婆に軽く挨拶をしてから、その庭を通ってお社へと帰って行った。背中を、老婆に見つめられながら。

(なんだか、憎めない婆さんだぜ)

悔しいが、それ以上に楽しかった。もう少し生きてもらってもいいか、と考えながら、ああ俺もやられちまったなあと苦笑いをした。

その日の夜。

平八郎は黄泉路にある小さな町の一角にいた。目の前には、目元以外全て毛で覆われた大男。こちらを睨みつけていた。

「だから、問題無しって言うてるだろう。身体はピンピンしてるし、寿命なんて後十年は生きるぜ」

「そんなバカな……予定では五年以上オーバーしているハズだが」

「なら、その予定が狂ってたのさ。文句なら上司に言いな」

平八郎は適当に言うとお大男に背中を向けた。大男は慌てて呼び止める。

「お、おい、報酬はいらんのか!？」

「うるせえよ、こんなの仕事じゃねえ。いいか、男なら自分の仕事にプライドを持つべきだ。俺のプライドとしては、今回の件で金をもらうワケには行かねえんだ」

そう言うとお、平八郎は無言を言わずその場から去ってゆく。一人残された大男は、しばらく呆然としたままそれを見送っていたが、平八郎の姿が見えなくなると口元を歪ませた。

「畜生道に堕ちた割には、人間性を無くしてないな。これは意外と早く生まれかわれるかもしれんな」

そう言うお、大男は手元の書類を確かめる。そこには毛筆で力強くこう書かれていた。

『北岡平八郎、三年間の刑』

その下の備考欄に、今新しい文字が浮かび上がる。

『計画前倒し、近々輪廻の輪に戻す』

そんなメッセージが出ていたなんて、当の平八郎には知るよしも無かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6099y/>

うねうねばなし

2011年12月15日00時48分発行